

アークフラッシュされた全国48箇所の老人施設は9年間インフルエンザの発症が報告されておられません。

< * > <http://www.arc-flash.co.jp> アークフラッシュ NEWS をダウンロードによりご覧頂けます

インドネシア保健省は、昨年の結核報告症例が28万5,243人で、前年の27万5,193人から1万人以上増加したと明らかにした。過去10年間で4倍に拡大している。コンパスが伝えた。

チャンドラ疾病抑制環境衛生局長代理によると、感染者数はHIV(エイズウイルス)感染者は結核を併発することが多いため、今後さらに増える見通しだ。世界保健機関(WHO)によると、インドネシアの感染予測者数は06年時点で53万4,000人。インド、中国に次いで世界3位で、10万人に対する感染予測数は234人で、インドの168人、中国の99人を上回っている。国内では1995年からWHOが推奨する直接監視下短期化学療法(DOTS)を採用しており、症例確認率、治癒率ともに改善している。国内の感染者数は90年代に比べて42%減少した。しかし、一時的に症状が回復すると、治療費や診療所までの交通費の負担から治療を中断する患者が多く、DOTSが有効に機能しないケースもある。また、完治しないまま放置しておくことで結核菌に耐性がつく可能性があるという。

アークフラッシュ関西は可視光型アークフラッシュを購入し、施工に当たっている。

可視光型アークフラッシュは、非常に強力に反応し今まで光触媒の弱点であった部分を非常に良くカバーしている。光触媒反応液で検査しても非常に強い反応が得られている。



(左) 反応液によって光触媒の反応強度が判ります。

青色が濃い程、強い反応です。

世界保健機関(WHO)は24日、結核に関する報告書を発表し、2007年の結核による死者は175万人だったと推計した。新規の感染者は927万人、感染者の総数は1370万人だった。

報告書は、07年の結核による死者のうち、4人に1人が結核を併発したエイズウイルス(HIV)感染者だったと分析。陳馮富珍(マーガレット・チャン)WHO事務局長は、「HIV感染者に対し、結核の発見と予防、治療を早期に行う必要がある」とし、各国に結核とHIVの双方に対処する措置を実施するよう訴えた。WHOはまた、既存の薬品による治療が極めて難しい「超多剤耐性」結核への感染が現時点で、日米欧を含めた世界56カ国・地域で確認されたことを明らかにした。

2009年3月24日、山東省の伝染病病院で、2月19日から22日にかけて少なくとも4人の患者が手足口病と見られる病気で死亡した。同市では手足口病が原因と見られる死亡例が急増しており、死者は20人に上るとの情報もネット上に流布しているが、市衛生局の責任者はこれを否定。手足口病による死亡例の報告は、生後7か月の男の子と1歳3か月になる男の子の2例だけだとしている。同市では救急設備が不足しているものの、山東省衛生庁が同市へ専門家を派遣するなど、予防と治療を強化するなどの対応がとられているという。



結核感染率が10年ぶりに上昇していることが、保健省(MOH)が22日に発表した統計で明らかになった。昨年通年のシンガポール人および永住権(PR)保持者の人口10万人当たりの感染率は39.8人。1998年に57人を記録して以来、一貫して減少していたが、2007年の35.1人を上回った。感染者数も前年比15%増の1,451人。特に50歳以上の高齢者と男性の割合が高く、それぞれ全体の6割(860人)、7割(1,022人)に上った。15~29歳の若年層の発病も増加しており、06年の135人から昨年は191人(全体で13%)となった。保健省は、感染率などの増加について「体内に潜伏していた結核菌からの発病や、特定の地域内で伝染した可能性が高い」と説明。23日付ストレーツ・タイムズによると、タントクセン病院の上級コンサルタント、シンシア・チー博士は「結核がまん延している国・地域から、医療旅行、労働、移民などで訪れる外国人が増えていることも影響したのでは」と指摘する。

WHOは23日、エジプトで38歳の女性が強毒性の「H5N1型」鳥インフルエンザウイルスに感染したと発表した。同国での鳥インフルエンザ感染はこれで59例目となり、インドネシア、ベトナムに次いで世界で3番目に感染者が多い国となる。この女性は14日に

同国中部の Elfath で発熱し、治療薬のタミフルを服用。現在、容体は安定している。WHOによると、女性は病気によって死んだ家禽と接触していたという。

2009年3月23日、北京市豊台区で児童20人を含む300戸で集団下痢が発生した。原因は水道水にあると見られ、区政府衛生局が調査を行っている。集団下痢が発生したマンションの住民によると、同マンションの児童が15日、下痢を起こし、19日に高熱が出たため病院へ連れて行くと、細菌性の感染によるものと診断された。別の児童も次々と腹痛を訴え、検査の結果はいずれも同様だった。その後、水道の水から黒い浮遊物が見つかり、ある住人は「水を口に含んだところ、生臭い臭いを感じた」と話している。22日までに300戸の住民が相次いで下痢になっている
最近の中国人は水道水を飲むのです。恐ろしい！！

ベトナム南部ドンタップ省のチャウタイン郡出身の3歳の少年が19日、鳥インフルエンザ感染によりホーチミン市内の病院で死亡した。20日付ベトナム国営通信(VNA)が報じた。鳥インフルエンザによる国内での死者は、今年に入って3人目。同市パスツール研究所のチャン・グオック・フー教授によると、少年は毒性の強いH5N1型ウイルスの陽性反応が出ていた。また少年が住んでいた地域では、同型のウイルスに感染した大人も1人いるという報告が上がっているという。

とんでもない眼科医！！医学知識ゼロ

近視を矯正するレーシック手術を受けた患者が角膜炎などに集団感染した東京・銀座の診療所「銀座眼科」。保健所がこれまでに確認した被害患者の数は75人にのぼり拡大の一途をたどっている。4年ほど前から急速に広がった人気の手術だが、自由診療のため価格競争が激化。同眼科の溝口朝雄(ともお)院長は安い価格設定で多くの患者を集めていた。「薄利多売」を求めた結果、衛生管理がおざなりになったことが被害拡大の原因とみられる。その実態とは…。

滅菌装置の不具合、消毒なし…考えられない被害

《他のクリニックに比べてかなり安いために不安を感じる方もいらっしゃると思いますが、機械や手術は最高のものと自負しております》《皆様の見える世界が少しでも快適になるお手伝いができれば、この上なくうれしく思います》

2月25日に集団感染が発覚するまで開設されていた銀座眼科のホームページ(HP)にはこんなうたい文句が並んでいた。手術費用は両眼で9万5000円～10万5000円。両目の手術で約10万円～50万円といわれる市場の相場で、最も低い価格帯は眼鏡やコンタクトレンズの煩わしさを嫌う20～30代の若い世代には魅力的な価格だ。高級感漂う銀座という立地も、患者に安心感を与えていたのかもしれない。

しかし、後遺症に苦しむ患者からしてみれば、「快適な世界」からはほど遠かった。

中央区保健所が銀座眼科から提出されたリストを基に把握している被害患者数は、昨年9月から今年1月に手術を受けた約639人のうち75人

保健所が医療機関を通じて39人の病状調査を実施したところ、20人が重症と診断され

ていた。このうち1人は、進行すると失明する可能性がある網膜剥離(はくり)。4人が角膜移植を検討しているという。「ブラジルやアメリカで同じような集団感染が発生したことがあったが、日本ではありえない被害。衛生管理に相当な問題があったはずだ」

日本眼内レンズ屈折手術学会の常任理事で東京歯科大水道橋病院眼科のビッセン宮島弘子教授は驚きを隠さない。銀座眼科をめぐるのは、保健所の立ち入り調査で、**手術器具の滅菌装置の不具合▽手術時に手をアルコール消毒しない▽手術室に手洗い場がない**—などずさんな衛生管理が明らかになっている。

「被害の発生は昨年9月23日から今年1月27日に手術した患者で発生した」。溝口院長は保健所の調査にこう説明した。溝口院長によると、昨年9月23日に手術した患者が角膜炎を発症したことで初めて**感染症の発生に気づいたという**。当初は非感染性の角膜炎と考えていたが、その後も発症する患者が相次いだため、感染性を疑い始め、独自に感染源を調べ始めたのだという。

「自分で医療器具の洗浄など試行錯誤し、改善できるものと思っていた」

今年1月中旬に手術器具の滅菌装置を交換したところ、1月17日に手術した患者を最後に感染症の発生が止まったとしている。

しかし、感染源を特定しないまま、4カ月にわたり手術を続けたことが、被害を拡大させた最大の理由だ。「銀座眼科では、昨年9月以前から感染者の**存在を認識しながら、隠していた可能性が考えられる**」。被害患者救済のため、

昨年9月以前にも、緑膿菌による角膜潰瘍(かいよう)などを発症した患者25人から相談が寄せられているのだ。1月27日以降に手術を受けた6人からの相談もあった。

これまでの相談件数は計108件(18日現在)。このうち、溝口院長の手術を受けた患者とみられる75人から聞き取り調査を行った結果、銀座眼科で手術を受けた後、他の病院で受診している患者は87%を占めた。また、何らかの後遺症の診断を受けた人は56%に上った。19年7月の手術で感染症を発症した東京都内の自営業の男性(34)は今年9日、溝口院長を相手取り、約2000万円の損害賠償を求める訴えを東京地裁に起こした。男性によると、レーシック手術翌日から目が痛くなり、2日後に別の病院で角膜潰瘍(かいよう)と診断されて18日間入院。手術を受けたが、視力が低下する被害に遭った。「溝口院長は手術に対するリスクを一切、説明しなかった。医師としての責任が軽すぎると思った」別の医師から設備を引き継ぐ形で開設し、「物件の賃貸料や設備の維持費だけでも300万円以上はかかっている」とある関係者は明かす。

銀座眼科のパンフレットや関係者によると、溝口院長は埼玉県出身。平成元年に産業医科大卒業後、自治医科大眼科教室に入局、東京医科大眼科助手を経て16年5月、さいたま市内で医療法人社団アイサージョンを設立。17年4月に埼玉・浦和に「溝口眼科北浦和」を開設した。20年3月には、東京・池袋に「池袋東口アイクリニック」と「池袋アイハートクリニック」を開設した(いずれも20年6月閉鎖)。池袋の2つのクリニックはレーシック手術と手術前の検査をそれぞれが分担し、1つのクリニックとして機能していた。いずれも開設者は、溝口院長とは別の医師の名前で届け出されていたが、クリニックの賃貸契約が溝口院長名義で結ばれるなど、事実上の経営者とみられる。

人通りの多い、駅に近い好立地を選び、クリニックを宣伝するHPの作成にも力を入れていたという溝口院長。「経営のセンスは結構あったのでは」と周囲は語るが経営のセンスは、人の命の問題を軽視する事では無いのである。関係者によれば、アイクリニックはレーシック手術専門で、すべての手術を溝口院長が1人で行っていた。緑内障などを専門とする溝口眼科でも、クリニックの窓にはレーシック手術の広告を張り出し、客集めをしていたという。昨年6月にアイクリニックで手術を受け、角膜炎を発症した会社員の女性(35)は溝口眼科の広告をきっかけに、アイクリニックで手術を受けた。「狭い雑居ビルの中であって驚いた。手術の時には患者用の手術着もなかったし、目などの消毒も簡単で不安に思った」と女性は振り返る。アイクリニックは、20年3月の診療開始から約1カ月間、保健所に開設届を提出しておらず、医療法違反の疑いも持たれており、池袋保健所が当時の患者に被害がなかったか調査に乗り出している。「違法かどうかは分からない。取材は受けられない」。溝口院長は取材にこう答え、足早に立ち去った。違法の前に消毒の基礎を学べ！！と言いたい。

銀座眼科の集団感染については、「感染症が1件でも発生したら、原因を特定するまで手術を中止するべきだった。手術室の衛生管理は医療の基本」と語る。

「レーザーそのものが1台約5000万円と高額で、維持費だけでも年間800万円かかる。価格の安い医療機関は手術を相当こなさなければ利益がでないでしょう」とも。

*** 発行責任者:株式会社アークフラッシュ本部**
笹川 透

03-5337-7275 FAX 5337-7465 sasagawa@arc-flash.co.jp

過去のアークフラッシュ NEWS はホームページよりご覧になれます。